

3月末に退団する小森谷巧が  
読響との24年を振り返る

聞き手・事務局



読響史上最長の24年間にわたりコンサートマスターを務め、約1350回もの演奏会に出演し、23年3月で退団する小森谷巧さんに今の思いなどを語ってもらいました。

—3月で退団しますが、今の心境をお聞かせください。

これまで一緒に音楽を作ってきた仲間たちがいるので、寂しい気持ちもありますが、一生懸命やりきったという気持ちです。入団した頃の読響には、一人一人は上手いのに全体としてまとまりきれていないという印象を持ったので、それを変えていく原動力になりたいと思い、今日まで演奏してきました。当時、常任指揮者の下では良い演奏をしても、翌週の若手指揮者の時にレベルが落ちてしまうことなどがあり、もどかしく感じていました。全体の調子が落ちそうな時こそ、良いパフォーマンスを保とうと思いました。今ではどんな演奏会でも全体でまとまり、細部まで仕上げ、手を抜かずに真摯に演奏する楽団になったと思います。その達成感があります。自分がメンタル的にも体力的にもしんどい時もありましたが、周りの楽団員、特に若い人には見せてはいけないと思い、頑張ってきたつもりです。

—アルブレヒト、スコロヴァチェフスキ、カンブルランら常任指揮者の下で演奏をしてきました。

アルブレヒトさんは、読響の音作りに尽力してくださいました。

リハーサルは、とても厳しかったです。ドイツものを中心とした曲目を多く演奏し、ワーグナーらの大曲での厚くふくよかなサウンドが印象的です。現代作品も多く取り上げましたので、最初は大変でしたが、回数を重ねると読響も慣れてきました。現代作品を取り上げる意義も感じられました。スコロヴァチェフスキさんも妥協を許さない厳しい人でした。楽曲への準備を入念に行い、より良い演奏をしようと本番直前まで決して諦めない姿勢に感銘を受けました。カンブルランさんは、彼しか出せない音質感などを持ち、何度も素敵な世界に連れていってくれる方でした。—その間、ご自身の変化などはございましたか？

特に50歳を超えた2010年ぐらいから、私の考え方も変わりました。それまでは、私が留学先の英国でイフラ・ニーマン先生に教えられた「クラシック音楽を演奏する上での最低限の規則を守る」ことが重要だと思って演奏してきました。しかし、徐々に自分の音楽観にこだわり過ぎず、より柔軟に考えるようになりました。歴史や風習は継承することも必要ですが、時代とともに少しずつ変化していくものだと感じました。読響や他の音楽祭などで色んな国や年代の指揮者・ソリストと音楽を作り、様々な捉え方があると分かったからです。2000年代にアルブレヒトさんとマーラーを演奏したことも、変わるきっかけの一つだったかもしれません。



2002年8月26日《第433回名曲シリーズ》尾高忠明指揮、ヴォルフラム・クリスト（ヴィオラ）と共にソリストとしてモーツァルトの協奏交響曲を演奏 ©読響

—今後の小森谷さんの音楽活動についてお聞かせください。

4月からは、愛知室内オーケストラのソロ・コンサートマスター兼アーティスティック・パートナーとなるので、この若い団体に自分の経験などを伝えていきたいと思っています。これまで同様に、昭和音楽大学を中心に後進の指導にも力を注ぎます。また、指揮活動もこれまで以上に展開していきたいと考えています。

—最後に、お客様へのメッセージを。

長い間、応援していただき、ありがとうございました。心から感謝しています。私も今後の読響を応援していきたいと思っていますので、お客様にも引き続き応援いただけると嬉しいです。

Profile 桐朋学園ソリストディプロマ、ウィーン国立音大を経て、英国王立音楽院の演奏家ディプロマを首席で修得。フムル国際コンクールなどで入賞。87年東京交響楽団に入団しコンサートマスターとして活躍。99年読響のコンサートマスターに就任。長く室内楽および松本や宮崎などの音楽祭でも活躍中。ソロCDを多数リリース。昭和音楽大学教授。